

第六章 日本の心

■和の国

日本の国が世界の歴史の舞台に初めて公式に登場したのは、一世紀のことである。『後漢書』に書かれてある「後漢の光武帝が、“倭”の奴国王に合印を授けた」とあるのがそれである。

“倭”は、それ以来、我が国の国名として用ひられるやうになり、八世紀に編纂された『古事記』にもこの字が用ひられてゐる。然し、この頃には訓読されてゐて、“やまと”と読まれてゐる。

“やまと”といふ言葉は、“山戸(門)”もしくは“山跡”といふ意味の言葉であつて、当

時の朝廷が在った地方の名称である。その“やまと”といふ言葉を“倭”といふ漢字に当てたものである。例へば、『古事記』には、“神倭伊波礼毘古命”かむやまといはれひこのみこと“倭建命”やまとたけるのみことなどの表記が見えるが、この例である。

然し、“倭”といふ漢字は、「矮小^わ」といふ意味の“委”と“人”とを組合せて作った会意字であつて、「矮小な人(ちびすけ)」といふ意味の漢字である。中国人は、自らを“中華”とか“中国”とかと称して誇つてゐるが、周囲の国々に対しては、西方は“戎”南方は“蛮”北方は“狄”東方は“夷”といふやうに、悪い意味の漢字を用ひ、これを卑しめてゐた。“倭”といふ呼称もその例だったのである。

そこで、この“倭”といふ悪い意味の漢字を使ふことを避けて、これと同じ発音で良い意味を有った“和”といふ漢字を用ひるやうになつた。また、これに美称の“大”といふ字を冠して“大和”とも書いた。然し、これを訓読する時には、“和”も“大和”も、共に

“倭”と同じやうに“やまと”と読んだのである。

ところで、この“和”といふ漢字ほど、日本の国名を見事に表現した文字は無いであらう。と言ふわけは、『古事記』が伝へてゐる我が国の最も古い国名は、「豊葦原水穗国」であるが、これを煎じ詰めると、正に“和”の一字に凝縮されるからである。

“和”といふ字は、豊かに稔つた稲穂の形を象つた“禾^{くわ}”と“口”とを組合せて作った会意・形声字であつて、「稲が豊かに稔り、十分に口に入る」といふ意味から、「食が足りて心が穏やかである」といふ意味を表した文字である。(“倭”も“和”も、古くは“くわ^{kuwa}”といふ発音であつた)

原始の時代の人間は、食へ物を求めることが、生活の総てであつた(と言っても過言ではないと思ふ)。だから、食へ物が足りなくなると、生きるために命を懸けて他人の食へ物を奪はうとする、それが古代人の生活であつた。だから、略奪から身を守り、平

和を保つためには、町全体を防壁で囲はなければならなかった。中国やヨーロッパは、今でもさういふ昔の城壁が、至る所に残ってある。

然し、日本には、昔からそのやうな必要が無かったから、さういふ城壁が全く見られない。ただ、奈良と京都だけが、町全体を城壁に囲まれてゐるけれども、それは中国の都を真似て都を造営したからであつて、決して防備のためではなかつたのである。

このやうな事実を見ても、我が国は、「食べ物が豊かに満ち足りた国」、つまり「和の国」であつた事が解る。「和」、つまり食べ物が豊かであれば、心は自然と“なごやか”になる。それで“和”を“なごやか”とか、“なごむ”と訓読するのである。“平和”とは、さういふ心の状態を表した言葉である。だから、我が国は、昔から「和の国」、つまり「平和の国」だったのである。

「日本」といふ言葉は、七世紀の初め、遣隋使の書状に用ひられた「日出づる国」を漢語で表したものと思はれる。然し、これが「ニホン」とか、「ニッポン」とかと読まれたのは後の事であつて、初めは“やまと”と読まれたのである。

■和の心

紀元六〇四年、聖徳太子によつて判定された我が国の最初の憲法「十七條の憲法」の第一条には、「和を以て貴しとなす」といふ言葉がある。

この“和”といふ言葉の意味は、音楽で言ふ“ハーモニー”のことである。“和音”とか“和声”とかと言ふ時の“和”がこれである。異つた音階の音声が入り混り、同じ音階の音声だけではとても醸し出すことの出来ない、深みのある音声となつて響く事である。

どんなに美しい花でも、それだけでは単調である。豪華な花あり、可憐な花あり、

濃艶な花あり、淡白な花あつて世の中は美しいのである。人の世界も、いろいろな考への人が智慧を出し合ひ、議論し合つて進歩発展して来たのである。それで、大聖孔子は「君子は“和”して同ぜず、小人は同じて和せず」と仰しやうである。自分の意見に同調する者とだけしか仲良く出来ない人間は小人物であつて、自分と意見を異にする人とも仲良く協調できるのが大人物なのである。

然し、孔子の国、中国では、この“君子”が必ずしも多くなかつた。だからこそ、孔子は“和”の心の大切な事を強調したものであらう。これに比して、我が国では“君子”に満ち満ちてゐた。正に文字通り「和の国」だったのである。だから、「日東君子の国」と呼んだのである。

昨年の自民党の総裁選でも、安倍、竹下、宮沢の三氏が、互ひにあれ程強く総裁の座を望みながら、最後は中曽根首相に人選を一任し、その裁定に服して、決定後は

笑つてお互ひに握手を交してゐる。これこそ“和”の精神の現れであり、「日本の心」である。かういふ姿は、外国人、とりわけ欧米人には理解し難いものだと思ふ。

このやうに、日本人は譲れるだけは譲るのである。譲つて紛争を避けることに努めるのである。その典型的なものが、『古事記』に見られる「大国主命の国譲り」である。これは神話であつて史実では無いとしても、「日本の心」を表してゐる事には間違ひない。

近くは、徳川慶喜の大政奉還がある。あのやうな大権移譲が、あのやうに自発的に行はれた例は、世界の歴史にも他に見ることは出来ないのではあるまいか。あの時点では、徳川家はまだ我が国で最強の実力を維持してゐたのであるから。

また、江戸城の明け渡しにしてもさうであるが、アメリカ軍の日本進駐の際における日本人の対応にしても実に平和裡に行はれてゐる。これらはいづれも「和を以て貴しとなす」日本の心の現れだと思ふ。

だから、日本人を“好戦国民”のやうに見るのは、とんでもない見当違ひの見方と言はなければならぬ。ただ、どうしても争ひを回避することが出来ない、と判断した時には、命を懸けても断じて争ふのである。太平洋戦争で、我が国の特攻隊がアメリカの軍艦に体当りして自爆したのも、争ふことの大嫌ひな日本人にして初めて出来た事だと私は思っている。戦ひが好きな人間は、決してあのやうな作戦は立てない。立てるわけが無いと思ふ。

それだから、一九四五年八月十五日、終戦を告げる天皇陛下の詔勅で、日本人は一斉に戦闘行為を中止し、武器を棄て、降伏したのである。好戦国民だったら到底考へられない事ではないか。しかも、全国民がアメリカの軍政に完全に服し、一人だって抵抗した者があなかったのである。ここにも、「和を貴ぶ」日本の心がよく現れてゐると思ふ。

占領軍の軍政下に在つて、日本国民ほど占領軍に協力した例は、世界の長い歴史の上でも他に見る事は出来ないだらうと思ふ。そして、これこそ日本人が“和”を貴び、平和を愛する国民であることを証明するものであると思ふ。

■日本人の思ひやり

日本人は、大事な物事を決める場合でも、敢て自分の意見を述べ、他人の意見に従ふ、といふ傾向がある。だから、その決定した内容が、自分にとって少々不満に感ずるものであつても、大勢に順応し、皆に同調して行かうといふ気持が強い。

然も、このやうな場合でも、決していやいやながら同調するといふのではなくて、氣持をさっぱりと切り換へて、積極的に同調して行くのである。その根柢には、「集団生

活を営んで行く上には、自分に多少の不都合があるのは当然の事であって、それを我慢しなければ集団生活を営むことは出来ない」といふ認識があるからである。

このやうに「いつも全体の事を考へ、周囲の人々に気を使ひ、自分勝手な行動を慎しむ」といふのが、典型的な日本人の態度なのである。ところが、最近、外国の人々の口から聞かされる言葉は、「日本人は自分勝手に、他人に対する思ひやりの気持に欠けてゐる」といふ言葉である。これは一体どうした事であらうか。

これには二つの理由があると私は考へる。その一つは、日本人の思ひやりが、よその国の人々の思ひやりと大變な違ひがあることに因る。「己の欲せざる所は人に施すことなかれ」だったら間違ひが無いのであるが、日本人の思ひやりは「己の欲する所を人に施せ」といふものであるから、有難迷惑になる恐れが多分にある。その上、「その行為は相手の為にしたのだ」といふ事を、相手に知られないやうにしてやるのが、本当の思ひやりである」といふ考へ方がある。つまり、相手から「有難う」と言つて感謝されるやうな思ひやりや親切な行為は、下の下の思ひやりや親切であつて、「相手が全くそれと気が付かないやうになされた思ひやりこそが、日本人が考へる“本当の思ひやり”である」といふものである。

然しながら、外国人の思ひやりや親切は、全くこの反対の形で行はれる。“What can I do for you?”と云つて、相手の希望する所を尋ね、その求めに応じて手を借してやる、といふのが欧米流の思ひやりであり、親切である。ところが、日本では、さういふやり方は相手を軽蔑した事になるものであり、相手に対して大變失礼な事になるのである。

だから、電車の中で、若者が老人に席を譲る場合でも、下車するやうなふりをして席を立つことが多い。事実、席を譲られると、頑固か老人などは、「わしは席を譲ら

れるほどまだ老いぼれては居らぬわ」と言つて怒り出す者がある。然し、このやうに怒る事は決して日本的ではない。他人から受けた好意は、たとへそれが「有難迷惑」であつたとしても、感謝して受けるのが、人間としての、とりわけ日本人としての常識なのである。わけても、「己の欲する所を人に族せ」といふ日本流のやり方では、当然、有難迷惑が多くなるのが自然の勢ひであるから、なほさらの事である。

もう一つの理由は、「今の日本人には、日本人らしくない日本人がふえてある」からである。これは、敗戦によって自信を喪失したために、立派な伝統や習俗までも劣つたものと思ひ込み、これを自ら棄て去つたことに因るものである。

■いろいろな思ひやり

同じ「思ひやり」と言つても、このやうに国により、民族によって大変な違ひがあるの
で、どうしても誤解が生じ易い。だから、お互ひにその「思ひやり」の違ひに「思ひやり」を致して、誤解が起らないやうに努力することが必要であると思ふ。同じ日本人の間であつても、関東と関西とは、言葉に大変な違ひがあるやうに、物の考へ方にも大変な違ひがあつて、それがよく誤解の種になるのである。

私は関東に生れ育つた関東人であるが、ある時、関西の人に仕事を頼んだことがあつた。その時、相手が「考へて置きます」と答へたものだから、文字通り「考へてくれてある」ものとはかり思つて、その返事を首を長くして待つたものである。然し、待つても待つても返事が来ないではないか。それで到頭しびれを切らして催促に及んだ。すると、何と相手は怪訝な顔をするではないか。まるで「そんな話は初めて聞いた」といふやうな態度である。そこで私は、「考へて置きます」と返事しながら、相手はその事につい

て全く考へてみてくれなかった事を知り、その余りな無責任さに腹が立って仕方が無かった、といふ経験がある。

その後、親しい関西の人から、「関西人の『考へて置く』といふ言葉は、実際には『考へる余地が無い』場合に使う言葉であって、つまりは『婉曲な拒絶』なのである。だから、半年も経ってから、断つたはずの話を持ち出されたのでは、相手の者はさぞかし面くらった事だらう」と教へられると同時に、その無知を大いに笑はれてしまった。

それでも怒りの気持はなかなか治まらなかったが、よくよく考へてみると、相手の申し出を無下に断るのは、相手の顔をつぶすことになって確かに良くない。そこで「考へて置きます」と言つて相手の顔を立てる。さうすれば引込みが着くといふものである。また、それで引き下りたくなかったら、「考へる所など無いぢやあないか」と言つて食ひ下る余地はある。「考へて置きます」とは確かにうまい返事である、と思はれて来た。

さうして、「やっぱり歴史の古い関西の人の方が、関東人よりも思慮が深いやうだ。これが文化の深さといふものかな」と思ふやうになり、怒りも治まって、遂に感心してしまつたものである。

■直に感心してしまふ日本人

この「直に感心してしまふ」といふ事が、これまた典型的な日本人の特徴の一つだと思はれる。日本人位、外国の文物を熱心に取入れて来た民族は他に無いと思ふが、これは、「直に感心してしまふ」事の結果ではないだらうか。

外国では、よその文化を取入れる場合は、その文化が自分たちの文化より優れてゐる事がはっきりしてゐる場合に限られてゐて、だから、自分の文化を捨ててその文

化を取入れるのである。ところが、日本の場合は、自分の文化と比較して優劣を決めることなく、それが良いと思へば、自分の文化を捨てることなくそれを取入れる。言はば、「文化の接ぎ木」をするのである。

例へば、宗教にしても、仏教が渡来すればこれを神ながらの神道に接ぎ木をしてゐる。儒教が入って来れば、これもまた神道に接ぎ木をするのである。仏教や儒教が優れてゐるからと言って、伝統の神道を決して捨てることをしない。また、反対に、神道を最高の道と信ずる者でも、仏教・儒教の取るべきものは取って決して退けてしまはない、これが「日本の心」なのである。

ところが、我が日本人が外国人と大いに違ふ所である。イギリス人でもフランス人でも、またドイツ人でも、キリスト教を取入れるに当っては、それまで自分たちの信じて来た宗教を捨ててゐる。自分たちの宗教にキリスト教を接ぎ本したのではないので

ある。

そもそも、日本人の神に対する信仰には、外国人のそれとは非常に異なるものがある。例へば、日本人の“祈り”は“い宣り”（古語では“い行く”といふやうに動詞に“い”を冠して言ふ語法があった）であつて、神に宣言するものであり、ただひたすらに「加護を賜はれ」と願ふものではない。古歌に「心だに誠の道に適ひなば、祈らずとも神や護らむ」とあるが、これは典型的な日本人の神に対する姿勢だと思ふ。だから、武将が出陣に際し、「神よ、照覧あれ」と祈るのである。これは、決して「加護を賜はれ」とひたすらに願ふ言葉ではない。「神の加護に値ひする人間である事を神よ照覧あれ」といふ事であつて、これはやはり“宣言”であり、だから“い宣り”だと思ふわけである。

神に対する日本人のこのやうな姿勢は、日本人が昔から豊かで穏かな自然に恵まれて、平和な生活を享受できたので、神に対してはただ感謝あるのみであつて、この上、

加護を願ふ必要が無かったからだと思ふ。これに反して、欧米人たちは、(序論で述べた事であるが)日本人が「自然の懷に抱かれる」と言つて来たのに対して、「自然を克服する」と言つてゐることで解るやうに、厳しい自然の中で生きて来たのであるから、神に対する態度が日本人とは根本から違つてゐて当然だと思ふ。

■日本人の宗教観

我が国では、昔から、「苦しい時の神だのみ」といふ諺があつて、平生は神の存在さへも考へてゐなくせに、一旦困窮した状態に陥ると、一心に神の加護を祈る、といふ者が多い。然しながら、その苦しい場を切り技けると、途端に、「のど元過ぎれば熱さ忘れる」の諺通り、神に祈つたことさへ忘れてしまふ、といふのが日本人の一般の姿のやう

に思はれる。だから、日本人の神に対する信仰心は、欧米に比べても、その他いづれの国の人々に比べても、「薄い」と言つて間違ひが無いのではなからうか。

それと言ふのも、自然に恵まれた日本といふ国に生れ育ち、暮してゐるからさうなるのである、と私は思つてゐる。幼児だつて、母親の助けを必要としない時には、母親の存在を忘れて勝手な事をしてゐるではないか。私もさうであるが、日本人は大方が神に対して、母親に対するやうに甘えてゐるのだと思ふ。

これに反して、欧米人の神に対する姿勢は嚴肅である。だから、お宮参りもするし、お寺詣でもするといふ日本人が不可解なものに思はれるに違ひないと思ふ。然し、お宮参りもするし、お寺詣でもするし、また、教会に行つて礼拝も出来る、といふのが本当ではないかと私は思つてゐる。なぜなら、日本人を作つた神と、インド人を作つた神と、ユダヤ人を作つた神と、その他あらゆる国の人々を作つた神とが皆別々の神である

わけが無いと思はれるからである。人間を作り、この世を作った神様が何柱もゐらっしゃるわけが無いではないか。だから、神道の神も、仏教の神も、キリスト教の神も皆同じだと私は思つてゐる。

一つの山でも、それを見る場所によっては全く異つた山のやうに形が違つて見えるものである。然し、それでも山そのものに違ひがあるわけでは無い。それと同じで、神にしても、これを見る立場によつて異にする所があつても、神そのものは一つであると言はなければならぬであらう。だから、日本の神も、インドの神も、その他いづれの神も皆同じであつて、お宮の神様を敬ぶ程の人ならば、仏教の神様もキリスト教の神様も敬ぶのが当然の道理であつて、キリスト教の神様には礼拝できるがそれ以外の神様には礼拝できないといふのは、狭量といふよりも道理に背いてゐる、と私は思ふ。

民族によつて神の姿が異つて見えるのが当然だと悟れば、自分たちが考へる神だけが本当の神などとはとても言へなくなるのではないか。さうならなければ、世界の平和などとても期待できないと思ふ。我々日本人が率先して総ての神々を礼拝し、「和して同ぜず」の精神を身を以て示し、平和の実を樂しむ姿を見せるならば、よその民族も追々と理解し、真似るやうになるのではないだらうか。

「桃も李すももも何も語らないけれども、その下に人が自然と訪れるために道が作られる」といふ諺の通り、河事でも実績を挙げれば、よそは必ずそれを見てゐて真似るものである。だから、これこそ日本人が世界に対して出来る最大の寄与ではないかと私は思ふ。

■イサオ・イシイといふ言ひ方

“姓名”といふ言葉が示してゐるやうに、日本人は、家の名前である“姓”を先にし、個人名を後にする、といふ習慣を有つ。これに反して欧米人は、個人名を先に言ひ、家の名前を後にする。然しながら、日本人に限って、欧米人に対して名乗る時には、欧米流に「イサオ・イシイ」といふやうに姓名を逆さにして言ひのが普通である。

ところが、この頃、日本人のこの習慣を「卑屈だから改めるべきだ」といふ意見を耳にした。然し、これは決して卑屈で欧米人に迎合してゐるのではない。これは、我が子に対して「お父さん」を自称し、甥や姪に対して「伯父さん」を自称するのと同じ精神から生れたものである。

“日本の言葉”の章で述べたやうに、欧米人は相手に関係なく。“一”といふ風に自称するけれども、日本人は相手に合った言葉を選んで使う。この「相手に合わせる」といふのが“日本の心”なのである。だから、欧米人が姓を後にして言ひ習慣を有つと知れば、その習慣に“合せて”「イサオ・イシイ」と名乗るのである。だから、これは卑屈ではなくて「思ひやり」の心の現れであり、“大人”^{たいじん}の行為なのである。

然し、「それは欧米人を見下した、日本人の思ひ上った行為だ」と言ひならば、「イシイ・イサオ」と名乗るやうに改めなければならぬであらうが、さてさうなると混乱が起つて、一々名乗るたびごとに説明しなくてはならなくなつて、お互ひに迷惑することになると思ひ。

ところで、相手の習慣に“合せて”自分の姓名を逆さにして名乗るのは、世界広しといへども、日本人だけではないだらうか。もしほかにあつたらお教へ頂きたい。中華民国台湾省の方の中には時々見かけるけれども、これは日本の教育を受けた方々であつ

て、それは日本の習慣に従ったものである。

さう言えば、西欧の人でも、日本の文化に心引かれた人の中には、「小泉八雲」のやうに日本名を名乗る者も無いではない。現今でも、イスラエルの漢字研究家のジャック・ハルペン氏は、「春遍雀来」と名乗ってゐらっしゃる。然し、かういふ方は、西欧人としては例外と言ふべきであらう。

それにしても、「春遍くして雀来る」とは何とも見事なお名前ではないか。一度名刺を交換したら、もう一生忘れないだらうと思はれる。然しながら、それはとも角、「ジャック・ハルペン」といふ名刺をもらふよりも、「春遍雀来」といふ名刺をもらった方が、どんなに嬉しいか知れない。やはり、「相手に合せようとする心」は、人と人とを親しく結び着ける働きを有った、これからの世界に生きる人間として最も必要な心構へではないだらうか。

■皆で渡れば恐くない

我が国には、古くから「隣百姓」といふ言葉がある。「隣では田んぼを耕し始めたぞ。家でも始めよう」とか、「隣では種播きをしてゐるぞ。家でも種播きをしなくては」とかと言った具合に、「隣近所に合せて仕事をするお百姓」といふ意味の事を言った言葉である。このやうに我が国では、種播き、田植えから収穫に至るまで、隣近所が同じ歩調で田畑の仕事をやるから、すべての田畑が一樣の成長を見せるのが、我が国の農村風景の特徴である。だから、田植えから取入れまでの水田の光景は、区画整理の見事さと相俟って実に整然としたものがある。

ところが、同じ水田でも、東南アジアの国々では、田植えから収穫に至るまで、てんでんばらばらであつて、我が国の画一的な光景とは実に対照的である。だから、「隣

百姓」は我が国の農業の特性であると言ってもよいのではないかと思ふ。

かういふ性格が、「赤信号、皆で渡れば恐くない」といふ考へ方を生んでゐるのだと思ふ。安全なはずの青信号でも、「独りで渡るのは恐い」のである。その反対に、危険であるはずの赤信号でも、「皆と一緒になら恐くない」と思ふのが、多くの日本人に共通した考へ方のやうである。かういふ考へ方は、この狭い風土の中で長い年月に互つて培はれて来たものであるだけに、「悪い」と思ひ、「改めなければいけない」と思つても、なかなか困難のやうに思はれる。

一つの土地に長い間住みついて生活して来た同じ農耕民族でも、我が国は東南アジアの国々の民族とはこのやうに異つた性格を有つが、これが、昔、牧畜に生活の拠り所を置いて来た西欧民族となると、一層大きな違ひを見せる。転々と住みかを移動して、言葉の通じない異民族とも接して生活して来たのであるから、強く自己を通さなけ

れば生きて行けなかつたに違ひない。だから、独立心が強く、日本人のやうには簡単によその考へ方を受け入れる事をしないのだと思ふ。

私はこの二十年間、幼児教育に従事してゐて、内外の幼稚園を多く視て来たが、日本の幼稚園位、いろいろな国のいろいろな教育が行はれてゐる国は無いと思ふ。それと言ふのも、日本人は(先に述べたやうに)よその物事に対して「直に感心してしまふ」性格があること、「その感心した事を直に見事に接ぎ木する特殊能力を備へてゐる」ためとである。

その点、よその国の人たち、とりわけ欧米人は、「よその物事に対して直に感心して、それを簡単に取り入れる」といふ事をしない。私は、大学の幼児教育研究所長を勤めてゐた十年間、ほとんど毎年、幼稚園の先生方を案内して欧米の教育視察をして回り、向ふの先生方と話し合ふ機会を有つたけれども、欧米の先生方はたいいていその国の

伝統的な教育法を重んじてみて、日本の先生方のやうに、よその新しい教育法に関心を有たないことを知った。モンテッソーリの教育法でも、シュタイナーの教育法でも、日本の方がそれらの本国よりもずっと有名であり、盛んに実践されてゐる位である。

■日本の心

人の心の動きは、普通、「知・情・意」の三つに分けて考へられるが、このうち、特に“知”を重んずるのが西欧人であるのに対し、“情”を重んずるのが日本人である、といふ事が出来ると思ふ。日本人は「お前は馬鹿者だ」と言はれる事はさほど恥とは思はないけれども、「お前は“情”の無い人だ」と言はれる事は、この上も無い恥かしい事であると考へる。それはそのはずである。馬鹿者は明らかに人間の仲間であるが、「情の無

い人」は「犬畜生に劣る」と言はれた事になるからである。

この世の生物をすべて“有情”と称して親しんで来た日本人の考へ方の正しかった事が、最近の「遺伝子」学の発達で証明されたと言つてよいのでは無いだらうか。

細胞の核の中に染色体と呼ばれる物が存在してゐて、それが遺伝に関係あるらしい事は我々の中学生の頃にも既に知られてゐた。それが、一九五三年、ワトソンとクリックといふ若い学者により「アデニン、チミン、グアニン、シトシンといふ四種類の塩基と呼ばれる物質が、デオキシリボースといふ糖とリン酸によつてつながれ、全体としては螺旋状の梯子のやうな形をしたデオキシリボ核酸(略称DNA)といふもの」であり、それは、微生物を含めたすべての生物に共通した構造であることが明らかにされた。

この事は、微生物を含めたすべての生物が、全く同じ材料により、同じ仕組によつて作られてゐる、といふ事を示してゐる。と言ふ事は、「この地球上に存在するすべての

生物が、皆、一つの生命体から分れ出たものである」といふ事を証明してゐることになると思ふ。とすれば、「この世に生きとし生けるものは、すべて、同一の先祖を共有する同胞である」といふ事になり、だから、「鳥の声や虫の音に耳を傾け、桜の花や梅の花に語り掛ける日本人の姿こそ、人間の在るべき姿である」と思ふわけである。